

平成19年度 第1回教育制度等専門部会会議録

- 1 開 会 平成19年6月28日(木) 午後1時30分
- 2 場 所 三条市役所栄庁舎2階201会議室
- 3 出席者 三条市教育制度等検討委員会教育制度等専門部会委員：雲尾 周、廣川邦夫、白鳥友宜、坂内孝治郎、小熊セイ子、鈴木さゆり、荒木勉、金子周一、左近武、柴野ひさ子、鈴木照司
オブザーバー出席：藤田信雄
- 4 説明のための出席者 松永教育長、阿部教育次長、池浦教育総務課長、駒澤学校教育課長、坂井学校教育課主幹、長谷川教育総務課長補佐、山川学校教育課長補佐兼統括指導主事、本多教育総務係長、志賀学校教育課指導主事、中村学校教育課指導主事、山本学校教育課指導主事、西山学校教育課派遣指導主事
- 5 会議次第
 - (1) 開会
 - (2) 開会のあいさつ
 - (3) 協議
 - ・ 小中一貫教育について
 - (4) その他
 - (5) 閉会
- 6 協議の結果及び経過
 - (1) 開会
(司会)

ただ今から、第1回教育制度等専門部会を開催する。それでは、松永教育長から開会のごあいさつを申し上げます。
 - (2) 開会のあいさつ
(松永教育長)

いよいよ核心に迫る専門部会で審議をしていただきたい。については、東京都品川区、広島県呉市への視察研修を行い委員も参加し、大変意義のある研修であった。今後の審議に生かしたい。

三条市のこれからのあり方等については、国の動向にも目を向け、教育の本質はどうあればよいかということを実際に具体的に考えていかなければならない。
 - (3) 協議
(雲尾委員長)

小中一貫先進地視察の報告がまとまっているので報告願いたい。

(阿部教育次長)

教育制度等検討委員会県外視察報告の概要説明(配布資料No.1参照)

(雲尾委員長)

質問等はどうでしょうか。

(雲尾委員長)

それでは、議題に入ります。協議題の小中一貫(連携)教育について説明願います。

(駒澤学校教育課長)

平成19年度教育制度等専門部会、検討項目1:小中一貫(連携)教育、「学力向上」「生徒指導」「教職員の意識改革」説明(配布資料No.3、No.4参照)

(雲尾委員長)

小中一貫教育について「学力向上」「生徒指導」「教職員の意識改革」から説明していただいたが、質問はないか。

(金子副委員長)

学力向上の現状の背景で「知識のみを重視する」「意欲を高めることが不十分」「小学校と中学校の進め方の違いに対応」の3つあると話があった。背景として言われたことがグラフから言えるのかどうか説明を加えていただきたい。

(駒澤学校教育課長)

グラフは数値で学力における中1ギャップの現象があるということを示した。背景には、原因として考えられるという分析である。

(金子副委員長)

背景の3つが大きく課題と関係し、基本的な考え方へもつながる大事なことなので根拠をしっかりとしてほしい。

例えば、習熟度別授業が行われている。三条市でもそういう授業を強力に押し進めてきたはず。知識のみを偏重した授業が多く、意欲を高め自ら学び自ら考える学習が不十分であると断定されると、今までやってきたことが否定される。私の認識と違うので、背景、課題、分析したことを具体的にもう少し説明してほしい。

(駒澤学校教育課長)

各学校、各中学校区で実態を分析し取り組んでいることは分かる。しかし、数値で成果があらわれていない事実がある。取り組んでいるが、共通認識をもつまでに至らず、一部の研究主任、学級担任だけで終わっていることもあるのではないか。

(山本指導主事)

NRTでデータを作り、経年比較をした。いろんなとらえ方ができるが、客観的に中学校へ行くと下がること、英語が標準の50を超えないことが分かる。イコール三条市の学力とは思っていないが、中学校で落ちているという分析として背景を考えた。学校訪問でも小学校と中学校の授業には差がある。

(金子副委員長)

基本的な考え方のなかの小から中への移行について大切に考えたいということか。併せて、5年生から中学校1年生の中期が大きなポイントだととらえていいか。

(駒澤学校教育課長)

小学校から中学校へのギャップを少なくするためにスムーズな移行ということで課題として2つあげた。

(西山指導主事)

全県学力調査で新潟県と三条市の比較がある。数値からどの教科もやや通過率が県の平均と比べると低い。三条市の子どもは、一問一答式の知識を問うNRTでは全国的なレベルにあるが、思考力や判断力等を問う幅広い問題はやや弱い。

中学校へ行ってNRTの成績が落ちる中学校に行くと人からの励ましより自分で学んでいくという傾向が強くなるので、意欲を高め自ら学び考える学習への取組の不足が中学校で伸び悩んでいる一つの理由ととらえている。

(柴野委員)

英語と数学が伸び悩みは、学習指導要領が改定されて系統性のある学習について繰り返し学習できなくなったことが大きい。系統性のある指導を小中でもっと十分にすべきではないか。特に英語と数学は系統性が大事なのでそれが大きい。

(廣川委員)

学力向上と教職員の意識改革は表裏一体で、項目を別々にしたことは理解できない。

小中一貫カリキュラムが教職員の意識改革のなかにもあるし、授業改善というのは、やはり教職員の意識改革にもかかわる。学力向上と教職員の意識改革と検討項目を分けた理由を説明してもらいたい。

(駒澤学校教育課長)

小中一貫教育では、学校は学力向上を保証する場所であると考えた。他に、学力向上を支えるために学習習慣の基盤になる生徒指導の充実あげた。それを支える指導することが教師。学校では相互に作用していると考えた。

(廣川委員)

教職員の資質・指導力の向上に絞って、教職員の意識改革というのであれば分かる。教職員の意識改革でも具体的に学力向上にかかわる。子どもの側に立った説明になっているが授業改革は教職員の指導力の向上とのかかわりもあるがとらえかたが曖昧だったので説明を求めた。

(雲尾委員長)

検討シートにある小中学校の進め方の違いについて具体的にどんなところが違うのか説明を加えてほしい。

(山本指導主事)

小学校は、分かる授業やできる授業が大事にされる。そのために、子どもたちが食いつくような教材が必要になる。それをどういうふうに順番を考えて提示し、1時間を進めていく。中学校では、定期テストがあつて試験範囲まで終わらなければならない。そのためには、たくさんやる、繰り返しやる、早くやり方を教えて早くできるようにさせることが大事にされる。結果として、下位の子どもたちには大変だという状

況がある。三条市では、スクールアシスタントを入れたり、T・Tをしたりすることで補っているが、なかなか改善につながらない。

(白鳥委員)

学力向上にしる、生徒指導にしる、全て教職員の意識改革の点が非常に大きい。授業の系統性、学習の系統性が非常に大事で、前時の復習等をしなければ新しい課題を解決できない。中学校に入るとボリュームが増えるので学年が進めば進むほど、遅れる子どもが多くなる。授業をきちっとやって、毎日の授業で復習の部分をどうするか、生徒が家に帰って何を勉強すればいいのかを指導しておかなければならない。そのへんの手抜かりが気になっている。これからいよいよ具体的になってくるが、やっぱり授業のとらえ方ではないか、教師がどういう視点で何を生徒に与えるか、その方法を考えると別なものが見えてくる。

生徒指導でも同じ。学校生活で生徒ができるものは何か、学級でやらなければならないものは何か、というとらえかたをすると別なものが見えてくる。

そして、それをどのように関連付けて組んでいくかという視点で教師の見る目が変わってくれば別なものが見出される。

(廣川委員)

三条のかけがえのない子どもは9年間だけではない。小学校に入ってくる以前の子どもたちをどうとらえるかが抜けると、大事なところを見逃す。見逃してはならない大事なことだと思う。幼稚園で話を聞くと、今の若い保護者との関係で悩んでいる。実態を聞くと小学校へ入る以前に相当いろいろな問題をもった子どもがいる。小学校の9年間だけでなく、入る前の段階にも視野を広げて、幼児期の子どもをどうとらえ、どうかかわり、保育所との連携をどうするかも基本的な考え方のなかに一つ入れていただきたい。

(雲尾委員長)

就学前教育と小中学校の教育との関係をどうとらえていくかだと思う。

(鈴木さゆり委員)

生徒指導の充実で、落ち着いて子どもたちが学習する状態にないことが見られる。クラスの中で居場所がないとか安心してられない、その影響は大きい。落ち着かない状況で授業を受けることは問題がある。それを小中一貫で、必要以上の不安を取り除くという観点から考えるのがよいのか、6・3という区分でみればいいのか分からない。基本的な生活習慣もそうだが、落ち着いて学習に集中できる環境をつくることが学力向上の一番大切なことではないか。

(鈴木照司委員)

今の小学生、中学生のことを考えると、小学校時代の勉強の仕方と中学校時代の勉強の仕方は違うので、うまく連携しないと中学校で学年があがるごとにますます伸びる者と伸びない者がでる。教職員の指導力の向上こそが最大課題。教材の作成の仕方、教材の活用の仕方、そこへ指導をどんなふうにしていくかという、そのことが一番大

切なのではないか。

また、前期中期後期として中期が一番大切。5年から中1の移行時期に学力に違いがあって、勉強のシステムの違いも出てくる。この中期を十分に検討しなければならない。

(雲尾委員長)

学びのスタイルでは、小学校では45分間座ったまま話を聞くことは殆んどない。必ず1時間のなかに活動が入る。ところが、中学校へ行くと50分座ったままの一斉講義形式の授業がかなり残っている。当然、急激に子どもたちが学ぶ意欲を失っていくという反省も一部にある。そこで、指導改善をしようと一生懸命にやっているが、なかなか改善が進んでいない。枠組みを変えないまま、指導力をあげようとしてもなかなかうまくいかない。そこで、指導力をあげたり学力向上にシフトしたりするために、より力を注ぎやすいようにするためには枠組み自体を変えること。つまり小中一貫によって、より改善しやすくなるということが根底にはある。ハードを変えて、ソフトを変えやすくするという発想である。中1ギャップがあるから先生が急に今までの方式を変えようとしたとき、情報のやり取り等も含めてうまくいかないのであれば、6・3の枠組み自体を変えたほうが、より情報が行きやすくなり指導が一貫しやすくなるということも含めて、一貫教育が入ってくる。そういう視点で、教職員の指導力が一番のものであることは分かるが、それをいかにうまくやっていくかということを考えていただきたい。視察の際、例えば呉でも説明がありましたが、始めの頃は小学校の先生と中学校の先生は見たらすぐ分かる状況だったが、一貫教育を進めていくなかで、どちらが小学校の先生、中学校の先生というのがほとんど分からなくなったという説明があった。そういうふうに、ハードを変えていくとソフトも変わっていくということもあるので、観点も入れて考えていただきたい。

(白鳥委員)

基本的には賛成だが、今まで6・3制であったいろいろな問題点が、前・中・後の3つの期のなかに、同じような形で現れてくるのではないかという懸念もある。子どもたちの身体面・精神面での発達、または個人差という要素をどのようにとらえて、この期間を考えていくかが大事。中1ギャップという言葉は使わなかったが、新1年生に対するオリエンテーション並びにいろいろな配慮事項について十分意を払ってきた。小学校の4・5・6年とドッキングさせることは一つの方策。

また、幼稚園の年長組の子どもたちがああやって下級生の面倒を一生懸命に見たり、自分たちのことを率先してやったりしているが、小学校に入ると急に赤ちゃん帰りの現象が出てくる。同じように、小6年生があれだけ学校の中心になってやったにもかかわらず、中学校に行くとやっぱり同じような現象が起きる。いくら分けてもどうしても一つの隘路になるので、連結をどうもっていくかは大事。9ヶ年をどういうふうな期で、いくつの期で、それぞれの期間の年数を設定していくのかは、三条方式がぜひほしい。

(雲尾委員長)

4・3・2にしたときに、小学校6年生が従来あれば学校のリーダーであったのに、リーダーでなくなってしまうという事例は確かにあげられている。

幼小連携においても幼稚園の年長で給食当番として活躍できるのに、なぜか小学校に入るとなぜか6年生が給食当番に来てくれる。幼稚園の先生から見ればもっとやれるのと思う。同じことが小学校の先生が中学校に送り出した子どもたちを見て、もっとできるのと思うことは従来からある。その辺も連携もしっかり考えていく必要があるということだと思う。

(左近委員)

昭和46年くらいに幼保小の連携ということで議論があった。小学校側からは、幼稚園、保育園はしっかりと小学校へあがってくるための準備をしてほしいという依頼があった。幼稚園、保育園側は、幼稚園、保育園にはそれなりのカリキュラムや保育内容があって、いかにして子どもたちが充実した生活が送られるかということが大事だということで、小学校と幼稚園、保育園の間で確執があった。幼稚園、保育園側としては、子どもたちの内面が豊かに育つための充実した保育内容を準備しなければならない。小中連携が話題になっているが、幼稚園、保育園と小学校の連携も同じことが言える。小学校時代にいかに充実した生活が繰り返され、心の中に育っているか、そのことが遠まわしだが、成績向上につながっていく。日々の生活の内容が豊かになれば、勉強しなさいといわれなくとも子どもは黙って机に向かうと思う。特に6年生というのは、精神的にも肉体的にも大人になっていく過渡期であることから、スムーズに移行できる方策を立てたときに、子どもたちの充実した内面が豊かに引き継がれていくのではないか。

(白鳥委員)

今、保育園、幼稚園の件も出たので、高校入試の問題をどう考えるか言いたい。高校入試は、入るのが目的ではない。高等学校でどのような勉強をするか、そのためにどれだけの努力をしなければならないか、力をつけなければという考え方をしている。入れればいいという意識ではないと思うが、最後の2ケ年、中2・中3で学び方も含めて、がっちりと学習を進めていくことが大切だ。

(鈴木照司委員)

人間は、常に変化への対応をどうすべきかが生きていくうえで大切だと思う。要は、小学校はこういうものであり、中学校はこういうものだ、また、高校はこういうものだ、社会はこういうものだという変化変革への対応という心構えを十分に認識させることが大切。常に軟着陸させるようなことばかりやってはならない。

中期は、変換にどのように対応すべきかを勉強の仕方の面とかいろいろな面で教えることが大切。変革という意味で大切な時期だと教育のポイントを絞っていただきたい。変革・変化への対応という人生に生きるその一つの試練という意味合いをしっかりと教えることが大切だ。

(金子副委員長)

鈴木委員さんに質問。現実の中高6年間の中高等学校がある。現実には高校入試の問題が出てきて、その対応策ということで中高一貫校ができたことと認識しているわけだが、その辺のところの認識はどうか。

(鈴木照司委員)

その辺のところは考えたことがない。

(金子副委員長)

今、中高等学校ができたので小学校6年生も受験がある。それだけでなく、附属への希望、私立中学校の明訓中学校、第一中学校もある。小学校と中学校が変化に対応するとの話だったが、同じように中高も変化に対応することができてきた。回答としてできてきたのが一緒ということなのかなと思う。問題の部分をクリアする一つの提案かなと理解している。

(鈴木照司委員)

基本的には変化・変革のなかで生きてきているのだから、一つの対処方法として新しい制度に入っていくのはいいかもしれない。しかし、甘やかさせてばかりではなく、人間としての生き様を教えていただき。幼稚園から小学校、小学校から中学、中学から高校、その変化への対応ができていないのであれば、変化への対応を教え込むことの方が大切。それを楽にするために6年間やってすっといけばいいというのはどうか。変革に対応できるようにすることがベター。

(白鳥委員)

基本的には、同感。ただ今の金子副委員長の意見を聞いて、どこに入試のチャンスを作るかということの関連もある。どこに試練をもつかは時期が違い質も違うが、節目という面から見たとき同じ部分がある。

(鈴木照司委員)

試練ということでは、いくつのとき、何年生のとき受けたほうがベターかは分からない。試練というものは常にある。それを切り開く耐え抜くことを習得させる場は絶対にもたなければならない。

(小熊委員)

私たちの子どもの頃は、何になりたいという夢をもちながら徐々に大人になっていった気がする。今の小学校は、とても楽しいから将来こういうふうになりたいという夢がもっているのかなと思う。中学校が終わったら入試があるが、自分は将来何になりたいかという別がない、大学も別にどうでもいいという子がいる。将来自分は何になりたいか、どうしてその高校へ行きたいのかというところまで、思い描いて高校入試を受けた子どもは少ない。小中一貫校で、自分は何をどういうことをやりたいかという目標や夢をもたせられると思いい賛成。

中高も魅力があるけれど、小中一貫であれば子どもたちに目標をきちんともたせられるのではないかと。

(白鳥委員)

課題のなかに思春期にあった指導と人間関係力の育成がある。それはかなり心に影響する部分がある。やはり試練というものは心の成長に一つのインパクトを与えて、その後の人生に大きな影響を及ぼす。一つの試練の高校入試は、入ることが狙いではない。高校に入ってどういう生活をするか、そして将来にどういうふうにつながるかが大切。日野学園でも市民科という新しい科を作って、進路指導を進めていた。大事なポイントだと思っている。

(鈴木照司委員)

基本はソフトの変革がスムーズにできるようにハードを変える。そういう意味で小中一貫、小中連携教育に賛成。

(雲尾委員長)

今までのところを整理する。全体的には最も必要なことは、教職員の指導力。学力向上に向かう教師の指導力に還元される。連携教育については、進めてよいという意見をいただいた。

次に、前期・中期・後期と分けた場合、中期が一般的に最も重視される場所である。そこでどのように指導していくかが重要である。しかし、今回特に皆さんの意見は、中期だけではなくて、前期の部分で前段階の幼保との連携を図っていかなければならない。そして、後期の部分でも高校を終えたあと、高校に行ってから何をするのかというための2年間をしっかりとみていかなければならない。小中一貫で9年間にして、前後が断絶してしまえば意味がなくなる。小中一貫教育としての形をとりながらも、前後との連携をうまく図るような形で進めていくのがよいのではないかということでもとめる。

(鈴木照司委員)

生徒と先生の関係で質問。よく子どもたちは、あの先生はダメだとか言ってしまいが、小学生の頃はあまりないのか、中学生だけの問題なのか聞かせていただきたい。

(松永教育長)

始業式に学級担任の発表がある。発表すると、子どもの歓声とため息があがる。人気のある先生というのは、小学校でも中学校でもある。子どもに人気があることと指導力が確かであることとは別な面がある。

(小熊委員)

中学校は、教科とか授業内容とか先生に対して無記名でチェックしている。

(松永教育長)

授業が終わった後に今日の授業について感想や意見を聞かせてほしいということ、先生が指導していることを子どもが分かったかを確認するためにやっていると聞いている。

(小熊委員)

子どもたちは、授業評価はするけれど一向に改善されないと聞いている。

(鈴木照委員)

あの先生はいい先生だ、あの先生では勉強をする気にはならないというようなことが先生方の耳に入るのか入らないのか。今のようにきちんとチェックして先生の方に返るのであればいいが、その辺はどんなものなのか。

(左近委員)

内部評価外部評価はどういう形でなされているのか聞きたい。

(駒澤学校教育課長)

年度の初めに校長は、グランドデザインを地域や家庭・保護者に説明することが義務付けられている。各学校では学期ごととか、年間を通して、地域・保護者から評価を受け、学校として検討を加え、場合によっては地域に戻したりして、次年度の新たな学校のグランドデザインをつくっている。その他、学校評議員制度として地域からいろんな人を選んで校長の学校経営に対していろいろ意見をもらっている。

(雲尾委員長)

自己点検自己評価を行ったときに、その自己評価結果を保護者・地域の人に示しながら、学校はこのように評価したけれど、これに対してどう思うかということを知る。それは、関係者評価という言い方にこの春から変えていくことになっている。学校評議員会は、学校の自己評価と関係者評価のずれはどうかを検討することになる。

第3者評価は、いわゆる視学官が来て評価をしていくような形の評価のこと。第3者評価はほとんどやっていない。自己点検自己評価したことをちゃんと出して関係者が評価していくという形が中心。それとは別に教員評価は今年から試行されている。教員評価の部分もこれから本格的に入ってくる。

(雲尾委員長)

最後の教員評価の部分は、教員の給与と教員評価を連動させていくことになると大きな問題になる。先程、習熟度別でやるとそれぞれの部分で正規分布ができるというのは、本当はおかしな話。大きな正規分布を切り取ってやっているわけなので、正規分布には絶対にならない。教員評価の場合もS A B C Dが正規分布するように考えているが、そもそも教員試験は受験者全体の上の部分の切り取っているはずなので、絶対に正規分布しないで三角になるはず。矛盾があって、いかに評価と実効性を連動させていくときにいろいろ問題がある。

(鈴木照委員)

先生方は、一定以上の知識を全員もっている。知識はみんなあるのだから、教える方法とか教え方が問題。反省をしない先生がいるので困る。改善がないと言える。

(雲尾委員長)

改善する時間がないことがある。先生方は、平均残業が毎日2時間。月に40時間位残業している。まるまる1週間分で、月にすると5週間働いている状況がある。それでも仕事がぎりぎり回っていくか回っていないかである。授業のすべてをレベルアップするために時間を費やしたら、1日2時間の残業では足りなくなる。授業改善

をできるための環境も作らなければならない。意識を変えた結果、それまでの8時間労働プラス残業時間2時間、10時間が、さらに3時間増えて1日13時間働いて倒れてしまっては困る。そうならない仕組みをつくるのが必要。

(鈴木照司委員)

企業では、どこに無駄があるか朝から帰るまで作業分析している。別世界の問題なのか。どこを改善すればできるのか、知識が問題なのか、動きが鈍いのか、何かが込み入っているのかすぐに分かるが。

(小熊委員)

小中一貫になれば先生たちの時間的な余裕ができるのか。

(雲尾委員)

小学校の先生は空き時間がほとんどない。時間がうまく空くような仕組みをつくる。例えば、学年で、合同でやるような授業がたくさんあればいい。体育も小さいクラスでやるよりも大きな2クラス、3クラスでやって先生は2人でやれば、1人は空けることができる。そして、空いている先生が他の先生のカバーができる。そういうようないろいろな仕組みを考えることができる。そういった点も含めてこのままでは考えにくい。

(鈴木照委員)

先生が過重労働とするならば、小中一貫連携教育になると改善する方向になるのか。やったらかえって大変というようなことはないのか。

(雲尾委員長)

しばらくは変わらないかもしれない。

(白鳥委員)

その辺、日野学園で聞いたら、研究期間で文科省の担当があった。今後、アシスタント的な補充をどこかでやっていくことも、初めの段階では必要。

(雲尾委員長)

中間の段階で整理したことが今日のまとめになる。

(4) 閉会 (午後3時50分)